

20世紀における欧米社会とキリスト教

The West and Christianity in the 20th Century

佐久間 重
Atsushi SAKUMA

21世紀を迎え、20世紀を様々な角度から振り返る試みが行われているが、本稿では、20世紀においてキリスト教が欧米社会の中でどのような展開をしたのかを考察することにする。欧米社会の中で、信仰と言う面ではキリスト教の力が衰退してきていることは否定できないであろう。このことは、日曜日毎に教会に行く人の数の減少によっても明らかである。それでも、欧米社会にキリスト教の精神的・物理的遺産は確固として残っている。一神教であるキリスト教の下で、欧米人は一つの尺度で明確な善悪の判断をする価値観を身に付けた。この価値観の下では曖昧な領域は排除される。ここでの最大の課題は、この絶対的だとされる尺度が欧米人以外にも合理性を有するかである。産業革命以降、欧米社会が物質的に他の地域を圧倒したために、欧米の価値観で他の地域の問題が判断された。さらには、欧米の価値観が普遍的なもので、他の地域の人々も受容するものであると考える人が多くなった。こうした姿勢は20世紀中間ぐらいまで続いたが、1960年代以降、欧米社会の中に欧米社会が持つ優越性の自負について疑問視する人達が出てきてから、他の社会の価値観にも注意が払われるようになった。この時期は、欧米社会においてキリスト教の影響力が後退していった時期と重なり合う。こうしたキリスト教の20世紀における欧米社会での展開を概観した後、21世紀にはキリスト教がどのような課題を持っているかを考察することにする。

キーワード：20世紀，欧米社会，キリスト教

20th century, West, Christianity

(1) はじめに

21世紀を目前にして、20世紀を様々な角度から振り返る試みが行われて来たが、本稿では、20世紀においてキリスト教が欧米社会の中でどのような展開をしたのかを考察することにする。欧米社会の中で、信仰と言う面ではキリスト教の力が衰退してきていることは否定できないであろう。このことは、日曜日毎に教会に行く人の数の現象によっても明らかである。それでも、欧米社会にはキリスト教の精神的・物理的遺産は確固として残っている。日本社会の中で自らを仏教徒と言い切れる人が少なくなっても、日本社会には仏教的生活様式が残っているのと同じである。その点で、欧米社会におけるキリスト教の展開を考察することは意義があることと思われる。

欧米社会に残っているキリスト教の精神的な遺産として、欧米人の価値観を挙げる事が出来る。一神教

であるキリスト教の下で、欧米人は一つの尺度で明確な善悪の判断をする価値観を身に付けた。この価値観の下では曖昧な領域は排除される。ここでの最大の課題は、この絶対的だとされる尺度が欧米人以外にも合理性を有するかである。産業革命以降、欧米社会が物質的に他の地域を圧倒したために、欧米の価値観で他の地域の問題が判断された。さらには、欧米の価値観が普遍的なもので、他の地域の人々も受容するものであると考える人が多くなった。こうした姿勢は20世紀中葉ぐらいまで続いたが、1960年代以降、欧米社会の中に欧米社会が持つ優越性の自負について疑問視する人達が出てきてから、他の社会の価値観にも注意が払われるようになった。この時期は、欧米社会においてキリスト教の影響力が後退していった時期と重なり合う。

欧米人の価値観に影響を与えたものには、キリスト教の他には、自然崇拜を旨とするゲルマン民族の元々

の宗教、さらにはギリシャ・ローマの文化がある。本稿では、後者二つの要素には紙幅の都合で触れないことにする。キリスト教が欧米社会の中でどのような展開を成し、それがどのような意味を持っているかを考察することにする。^{注(1)}

(2) 20世紀のキリスト教思想

19世紀から20世紀に変わろうとする時、欧米の多くの国々では、科学技術の萌芽の中で自分たちの将来に対して楽観的な見方をする人が大勢を占めていた。そして、自分たちの思想には自信を持つ、欧米社会以外の思想にはそれほど関心を示さなかった。こうした思想的傾向を反映したのがリベラル神学である。当時、キリスト教の世界、特にプロテスタントの中では、リベラル神学が勢いを強めていった。リベラル神学では、神や永遠を問うことよりも、人間や現世の問題解決に焦点が当てられ、これを人間の能力で解決が可能であるとした。リベラル神学を代表した人物がアルブレヒト・リッチェルやアルベルト・シュヴァイツァーであった。ローマ・カトリックの中にも、信条よりも行動を重視するモダニストの数が多くなった。^{注(2)}

こうした楽観主義的な神学の興隆への巻き返しとして、当時の教皇ピウス10世を中心とした正統派がローマ・カトリックの改革を進めた。プロテスタントの世界でのリベラル神学への反発は、ローマ・カトリックよりも極端な形となった。「ファンダメンタリスト」（根本主義者）と呼ばれる人達が、聖書を字義通りに解釈し、キリスト教の正統性を頑なに守ろうとした。

リベラル神学に従えば、来るべき20世紀は愛と正義に満ちた平和な新世紀になるはずであったが、こうした楽観主義は、第1次世界大戦という未曾有の混乱によって打ち破られてしまい、有効な対応が出来なかった。第1次大戦は、経済、軍事、領土に関する国家的インタレストの衝突に起因があり、宗教上の要因によって引き起こされた訳ではなかった。こうした状況の中で、各列強国ではリベラルばかりでなくその他のキリスト者達も、国家的インタレストをキリスト教の下で正当化し、自らの信条と世俗的な愛国心を同一視した。ここで、世俗の国境を越えているはずのキリスト教世界は、国家的境界によって分割されてしまった。こんな中でも、国境を越えた平和主義を唱えたキリスト者もいたが、彼らの主張は国家的衝突を押さえることが出来なかった。このことは、普遍性を標榜するキリスト教が、複雑化する現実の世界では限界を有して

いることを明らかにし、20世紀全般に影を落とすことになる。

人間の能力を楽観視したリベラル神学は、第1次世界大戦の混乱に対して全く無力であることを明らかにする。この反動として、第1次大戦後には「ネオ・オーソドクシー」（新正統派神学）と呼ばれる新しい神学が興隆した。この神学は、ヨーロッパでは「危機神学」とも呼ばれ、大戦後のヨーロッパ文化、特にキリスト教の危機に対処しようとするものであった。

「ネオ・オーソドクシー」を提唱した代表的神学者には、ヨーロッパではドイツのカール・バルト、アメリカではラインホルド・ニーバーがいた。^{注(3)}

リベラル神学が人間に焦点を当てたのに対して、「ネオ・オーソドクシー」は聖書の中に描かれている神や信仰による義という宗教改革の主要な原理を重視した。人間は能力に満ちた存在と言うよりも、原罪を負った存在であり、この原罪を贖うことが出来るのは神のみである、というのが「ネオ・オーソドクシー」の主張である。この神学に従えば、人間の意図によって社会を管理しようとするマルキシズムは、神の領域に余りにも入り込んでしまったものであり、人間の有限性を無視してしまった。この点で、「ネオ・オーソドクシー」は、20世紀最後の10年間を目前にした社会主義の崩壊を看破していたことになる。「ネオ・オーソドクシー」は、現代的文化の中で、神の絶対性という伝統的なキリスト教信仰をいかにして強めて行くかに腐心した。

(3) 第1次世界大戦とキリスト教

第1次大戦は、キリスト教世界、とりわけローマ・カトリック世界に大きな打撃を与えた。ローマ・カトリック国のうち、ベルギー、フランス、イタリアなどは戦争による打撃をまともに受けた。それ以上に致命的な打撃を受けたのがオーストリー・ハンガリー帝国であった。オーストリー・ハンガリー帝国は、ローマ・カトリックを熱心に信仰していたハプスブルク家によって支配されていたが、第1次大戦後にはこの帝国自体が消滅してしまったのである。ドイツでは、第1次大戦前にはローマ・カトリックの興隆が見られたが、第1次大戦が始まると国内外の諸問題に直面し、国民の多くは宗教への関心を失ってしまった。

第1次大戦後、キリスト教の指導者達は、戦争によって被害を受けた人達への救済を行った。ローマ・カトリックは、ローマ教皇を中心にして、教会の資産

を使って援助活動をした。他方、プロテスタントの側も、デノミネーションの違いを越えて、戦争被害者への救済活動を行った。しかし、こうした救済活動でも余りにも大きかった戦争の災禍を十分に癒すことは出来なかった。

20世紀において思想や組織の面でキリスト教への大きな試練となったのが、第1次大戦末期に生じたロシア革命を理論的に支えたマルキシズムの拡大である。カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスの理論の大きな特徴は、唯物主義であり、神を排除している点である。この思想が、現実の社会に適用されることとなった。ロシアでは、レーニンに率いられたボルシェヴィキが政権を握り、絶対的な専制政治が行われるようになった。レーニンの独裁政権は、宗教は国民が共産主義を受け入れる際の障害となると考え、宗教を排斥しようとした。レーニンの後継者となったスターリンは、学生時代は司祭への道を志し、キリスト教を信仰していた。しかし、政治家として力を強め、政権の座に就くと、宗教を民衆から遠ざけるために宗教弾圧を行った。特にロシア正教に対しては、徹底的な壊滅を計った。

第1次世界大戦後、キリスト教にとって大きな難問として横たわったものに、共産主義やナチズムの台頭、1929年の大恐慌があった。欧米社会が混乱すると、教会から人々の足は遠ざかり、教会の社会への影響力は低下した。社会の混乱は、宗教組織にとっては信者を獲得するのに好都合な状況ではあったが、キリスト教はこの好機を活かすことが出来なかった。ここで、ヴァチカン当局が行ったことは、イタリア、ドイツ、ポーランドなどと宗教協約を結ぶという政治的対応であった。これによって、信教の自由を確保すると共に、西欧社会の世俗化の進展を押さえようとしたのである。しかし、ヴァチカンとヒトラーとの協約は、むしろナチズムをヴァチカン当局が信認することを意味してしまった。

キリスト教全般が社会への威信を失うなかで力を伸ばしたのは、聖書を字義通りに信じようとする「ファンダメンタリズム」であった。1925年アメリカのテネシー州デイトンで行われた「モンキー裁判」は、「ファンダメンタリズム」の力の根強さを明らかにした。裁判の結果、進化論を教えた生物学教師ジョン・スコップスは有罪となったが、「ファンダメンタリズム」はその先鋭性を浮き彫りにしてしまい、この裁判以降、一般大衆への説得力を失う結果となってしまっ

た。しかし、「ファンダメンタリズム」は、欧米社会、とりわけアメリカではその後も根強く生き続けて来ている。このことは、プロテスタントのメノー派に属する集団「アーミッシュ」が現代文明を拒絶して生き残っていることと併せて、欧米社会におけるキリスト教の根深さを物語っている。

(4) 第2次世界大戦とその後のキリスト教

キリスト教世界は、第1次世界大戦によって大きく動揺し、失地を回復する間もなく、第2次世界大戦という、より大きな試練を迎え、その無力さを一層明らかにしてしまった。第1次大戦後のヴェルサイユ体制は、ウィルソン米大統領のキリスト教信仰から来る理想に基づくところが大きかったが、英仏の国際環境への対応の中で、世界平和の確立よりも、英仏へのドイツ国民の敵意の増長をもたらしてしまった。こうした事態に乗じて、ヒトラーはドイツ国民から大きな支持を獲得してしまった。ドイツのキリスト者の多くは、ナチズムがなくなれば、共産主義が台頭すると考え、ナチズムには敢えて抵抗しなかった。ナチズムに抵抗したキリスト者達は、弾圧され、死を余儀なくされることもあった。ローマ教皇でさえ、ナチズムが犯した非人間的なホロコーストに対して消極的な対応しかできなかった程である。

第2次大戦が終局を迎えると、ヨーロッパの多くの国々で、疲弊した社会からの救いをキリスト教に求める人々が一時的に増加した。しかし、大戦後の社会の混乱が収まり、経済的な繁栄が始まると、人々の心は物質的な欲求に走るようになった。欧米社会の商業文化は、キリスト教世界に第2次世界大戦そのものよりも大きな打撃を与えることとなる。そして、欧米社会では、これまで経験したことがないほどキリスト教の影響力が弱まるようになって行く。

こうした状況の下で、プロテスタントとローマ・カトリックは歴史的な和解を果たしていくことになった。その端緒が、プロテスタント諸組織間の協力の機運である。20世紀初頭、キリスト教の伝道活動にはキリスト教の各々の組織間の競争意識が強く見られた。しかし、改革派の諸教会が組織間の競争の無益さを指摘するようになり、組織統合の機運が出てきて、「エキュメニカル運動」が始まった。まず、160に及ぶプロテスタントの伝道組織がそれぞれの代表を送り、1910年にスコットランドで「世界宣教会議」を開いて、組織間の連携の道を開いた。その後、キリスト教の諸組織

の協力による「生活と実践の運動」や「信仰と職制の運動」が相次いで始まった。この3つの運動は統合され、1948年に「世界教会協議会」(the World Council of Churches)がオランダのアムステルダムで組織され、今日までプロテスタント諸教会の協力を推進して来ている。^{注(4)} WCCは、メンバーとなっている教会を拘束することよりも、世界の貧困や正義の問題に関するメンバーの協力の推進を主目的にしている。ギリシャ正教は1961年にはWCCに加盟し、その他の正教教会も後に続いた。ローマ・カトリックの側は、最初はプロテスタントのエキュメニカル運動に対してあまり関心を示さず、プロテスタントとの融和には距離を置いた伝統的な姿勢をとっていた。こうした姿勢を大きく変え、プロテスタントとの対話の道を開いたのが、1962年から開かれた第2次ヴァテカン公会議である。

ローマ教皇ヨハネス23世は、カトリック教会の刷新を目指し、1962年に全世界の司教達を集め、第2次ヴァテカン公会議を開催した。この会議により、ローマ・カトリックはそれまでの神学的立場、社会問題との関わり方、プロテスタントやユダヤ教やギリシャ正教との関係などの面で、自らを正統とするこれまでの硬直的な態度を変えて、他のキリスト教集団の存在を容認する柔軟な立場をとるようになった。しかし、公会議以降でも人工中絶や離婚への反対の立場は堅持されることになり、ローマ・カトリックの現代社会との乖離は依然として解消されないでいる。ヨハネ・パウロ2世は、伝統的なキリスト教の信条に基づき、今日の物質文明の限界を乗り越え、生命への尊厳と貧者への愛に満ちた「新しい文化」の創造を世界に呼びかけている。

(5) 現代社会へのキリスト教の貢献

20世紀においてキリスト教の諸教会は、社会の諸問題に関して道義上の指導者の役割を果たしてきたところがある。信仰活動と同様に社会的活動は、キリスト教教会の中心的な役割となっていた。社会活動については、リベラルなキリスト者も保守的なキリスト者も連携することが出来た。20世紀において、この社会活動により命を落としたキリスト者の数は、19世紀を上回った。中国大陸で布教中に1934年に共産党のゲリラによって処刑されてしまったスタム夫妻、ナチに対する反対活動により殉教者となった神学者のディートリッヒ・ボンヘッファー(1906-45)、アメリカの公民

権運動で中心的な役割を果たしながら1968年に暗殺されてしまったマーティン・ルーサー・キング牧師、エルサルヴァドルの軍事政権により1980年に暗殺されたオスカー・ロメロ神父(1917-80)などがその代表である。また、多くの危険に直面しながらも、インドの貧しい人達のために慈善活動を行ったマザー・テレサのように、世俗化の進んだ今日の世界でも多くの人から深く崇拜されるキリスト者もいる。キリスト教の社会活動は、海外での慈善活動をも統括する組織を作ったり、基金を設立したり、発展途上国の貧者のための教育施設を作ったりして、他の宗教の組織には見られない成果を上げてきた。

アメリカやイギリスでは、キリスト教の社会活動の特徴として、大きな教派が大政党と結びつき政治に影響を与えるということがある。これらの教派は、どちらかと言えば大政党の保守勢力を形成して来ている。他方、ヨーロッパでは、キリスト教の指導者がそれぞれの国で「キリスト教民主主義」というキリスト教の価値に基づいた政治理念、組織を作り、中道左派勢力を形成して来ている。大戦直後の西ドイツのコンラット・アデナウアーなどがその先駆者である。その他、イタリア、ベルギー、オランダなどでもキリスト教民主主義が大きな役割を果たしてきた。ただ、今日、キリスト教民主主義が、当初の政治理念から離反し、保守化しているのではないかとの批判を浴びている。

ラテン・アメリカでは、ローマ・カトリック教徒が政治の最前線で指導力を発揮している。1968年に「ラテン・アメリカ司教会議」がコロンビアのメデリンで開かれ、貧困対策をキリスト者の優先課題として以来、キリスト者の政治との関わりが加速された。さらに、1971年にペルーの司祭、グスタボ・グティエレスが「解放の神学」を発表し、時には平和のための暴力の行使を肯定した。保守派の神学者は、「解放の神学」がマルキシズムに影響されている、と非難した。ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世も、「解放の神学」が余りにも政治的であるとして反対したが、貧者への支援という「解放の神学」の根本には支持を明らかにした。また、ヨハネ・パウロ2世も、出身地のポーランドを訪問し、正義と慈悲の実現を訴え、そのことがポーランドの労働者を勇気づけ、後に起こる共産党政権の崩壊を結果的に後押しすることになった。

キリスト教の様々な組織は、20世紀の後半から積極的に政治運動を展開するようになった。反戦運動から、東欧の共産党政権の打倒まで、キリスト教は政治運動

の面で大きな成果を上げた。世界教会協議会は、反核と一般市民の安全を求めた運動を展開している。ローマ・カトリックも、第2次ヴァティカン公会議以来、暴力への反対を促進して来ている。

(6) プロテスタントの新しい運動

ローマ・カトリックを含めた、伝統的なキリスト教の多くの組織は、信仰面での影響力は失ってきているが、そうした状況の中で現在最も宗教的活気を呈しているのが、テレビなどのメディアを活用して伝道活動を行うプロテスタントのエヴァンジェリカル運動とペンテコスタル運動である。

エヴァンジェリカル運動は、1700年代の信仰復興運動以来、プロテスタントの中核をなす運動であり、聖書研究や伝道活動を重視したものである。「エヴァンジェリカル」という言葉は、「福音」を意味するギリシャ語に起源を持つ。どの教派にも「エヴァンジェリカル」と呼ばれる指導者はいる。彼らは、自分の言葉や活動を通じてキリストによる救済の福音を世界に伝えることを自らの使命だと任じている。エヴァンジェリカル達は、教派から独立した自分の教会を持つことを望む傾向がある。

20世紀初頭、エヴァンジェリカル運動は、自然科学や社会科学の発展によって低迷していた時期があった。また、この時期、プロテスタントの世界は、リベラル神学とファンダメンタリズムに二分され、比較的穏健なエヴァンジェリカル運動は影が薄かった。第2次大戦後、エヴァンジェリカル運動は、アメリカを始め、イギリス、ドイツで興隆するようになった。アメリカのエヴァンジェリカル達は、自らの組織、機関誌、神学校を作り、運動を発展させた。その中でもビリー・グラハムは、1949年に小さな信仰復興集会を開いて以来、世界的に運動を展開し、エヴァンジェリカルの代表になった。

ペンテコスタル運動は、1900年代以降アメリカで広まった運動であるが、「聖霊の恵み」を実践することを目指す。具体的には集会の中で指導者が予言を行ったり、参加者の病気を治したりして、自らのカリスマ性を訴える。また、参加者は、ゴスペル・ソングや踊りに熱中し、集会そのものが熱狂的なものになる。第2次大戦後、ペンテコスタル運動は組織を確立して、多くの人の支持を得るようになった。アメリカでは1960年代、1970年代にローマ・カトリックを含めたルーテル派やバプティストを始めとする主要な教派の

司祭や牧師が、ペンテコスタル運動の要素を採用し、教会の活性化を図って来た。

今日では、伝道集会の中でペンテコスタル運動の指導者がカリスマ性を発揮している様子がテレビで放送され、支持者の数が増大している。リチャード・ロバーツがその代表で、「テレビ・エヴァンジェリスト」と呼ばれたりしている。伝統的な教会組織とその活動が衰退している中、ペンテコスタル運動は一層力を伸ばしている。

(7) おわりに

インターネットを始めとする通信網の発達が世界中の人々の生活を大きく変えているが、キリスト教もこうした技術を活用し、世界の隅々までその信仰を伝えようとしている。キリスト教は、地球規模の広がりを見せており、発展途上地域では驚異的な割合でキリスト教の信者の数が拡大している。しかし、欧米社会では教会での礼拝への参加者がどんどん減少して来ている。特に「メイン・ライン」と呼ばれる主流を形成してきた教派の社会での影響力が後退して来ている。

20世紀後半には、欧米社会でキリスト教教会の礼拝に参加する人の割合は、全人口の1割にまで落ち込んでしまったと推定されている。また、キリスト者であっても、教会の信条とは違った価値観を持つ人も多くなった。その典型が、離婚、人工中絶、安楽死に反対するローマ・カトリックの公式な立場と、個々のカトリック教徒の中にはそれらを容認する人が多いという違いに現れている。このように欧米社会ではキリスト教の影響力が低下しているのであるが、社会主義の崩壊後の東ヨーロッパでは信仰の自由が認められ、キリスト教が再興している。しかし、東ヨーロッパでは新興宗教が勃興出来る状況も生じており、スラブ正教にとっては必ずしも好都合とは言えない。アメリカでは、大多数の人は自らをキリスト者と任じており、教会での礼拝への参加者も多い。憲法により政教分離の原則が確立されているため、公立学校ではキリスト教と教育を分離することに必要以上の注意が払われているが、それでもキリスト教はアメリカ人の生活の中で重要な役割を果たして来ている。では、21世紀において、キリスト教は欧米社会の中でどのような課題を持っているのであろうか。

欧米社会ではローマ・カトリックも含めキリスト教は、昔日の面影を失いつつある。キリスト教神学による全知識の支配が、自然科学を始めとする新しい学問

によって排除されたことによってヨーロッパの知的発展が達成されたことを考えれば、ヨーロッパにおけるキリスト教の後退は必然であった。米国では、情報網を活用したキリスト教の組織が活性を示しているが、キリスト教に基づく価値観が一般の人達から後退していることは否めない。しかし、今日の欧米社会の文化の多くの部分はキリスト教に基づいて形成されたのであり、キリスト教の精神は後退しても、これらの文化的枠組みはこれからも残って行く。つまり、一神教に基づく善悪の判断や「福音」を伝えると言う使命感は欧米社会に根強く残ることになる。

キリスト教が世界的な宗教に成り得たのは、ローマ教皇を頂点とする教会組織を確立し、世俗の権力者を精神的にも政治的にも支配する制度を作り上げ、世界への福音の伝道を組織的に行ってきたからである。キリスト教の世界への拡大は、欧米の国々の植民地の拡大と共にあった。今日では欧米の植民地はほとんど消滅したが、キリスト教だけは拡大を続けている。そして、キリスト教は、今日では欧米社会よりは第三世界で一層の拡大をするようになった。

キリスト教に基づく欧米社会の非キリスト教世界への姿勢には、往々にして自らの考え方の押しつけのようなどころが見受けられた。文化の面では、東洋の文化に関心を示す欧米人が多くなり、自らの価値判断の押しつけはかなり克服されてきているが、国際政治の舞台では依然として顕著である。欧米社会そのもののなかでキリスト教の精神的基盤が脆弱になりつつあり、家庭の崩壊が様々な問題を引き起こしている。欧米社会にとっての内なる課題は、価値観の混迷を如何に抜け出すかである。その際には、キリスト教文化を活性化させると共に、キリスト教以前にあった自然崇拝的宗教を掘り起こし、新しい価値観を創造していくことが重要になるのではないか。このことが可能になれば、国際政治に於ける欧米人の姿勢も改善されると思われる。インターネットを始めとする情報網の発達、世界の一元化を推進するが、個々の人が情報の発信源に成り得るので、他方では埋もれていたものが掘り起こされ、忘れかけていた文化への注意を喚起する機会を提供する。その点では文化の一元化と多元化が同時に進行していくということでもある。キリスト教の一元的な文化を持つ欧米社会が、いかにして多元的な文化を形成していくかが、欧米社会に課せられた21世紀の課題だと思われる。

注

- (1) 20世紀におけるキリスト教の展開については、(Michael Collins & Matthew A. Price, *The Story of Christianity*, New York: DK Publishing, Inc., 1999) を参照。
- (2) リベラル神学については、拙論「アメリカにおけるリベラル神学の歴史的系譜」(東京外国語大学『地域研究』第3号, 1985年) 参照。
- (3) ラインホルド・ニーバーの思想については、拙論「ラインホルド・ニーバーの思想の研究----キリスト教の歴史の意味について」(世界経済1989年4月号) を参照。
- (4) WCCの詳細については、拙論「WCCの社会的・文化的影響力の実態と今後の課題」(中央学術研究所編『宗教間の協調と葛藤』, 佼成出版社, 1989年) を参照。